

Rakuno Gakuen University

研養学園大学

Vol. 141 新春号

第14回
全日本ホルスタイン共進会
北海道大会で3頭が好成績!!



聖句

新しい歌を主に向かって歌え。
主は驚くべき御業を成し遂げられた。
右の御手、聖なる御腕によって 主は救いの御業を果たされた。 (詩編98編 1 節)

Green Stage ～全共で活躍した生徒・学生が全員集合!～



新しい文明を築く 酪農学園へ

理事長 麻田 信二



年頭に当たり、謹んで新年のお慶びを申し上げます。今年一年、皆様のご健勝とご多幸を心からお祈り申し上げます。

昨年秋に行われた北海道では初めての開催となった第14回全日本ホルスタイン共進会において、3頭出品された酪農学園の乳牛が第2部で優等賞1席、第3部で1等賞2席、第17部で優等賞2席、高校生リードマンコンテストでは、とわの森三愛高校の生徒が2年生の部で1位、3年生の部で2位に入る輝かしい成績を獲得することができました。

このことは、酪農学園フィールド教育研究センターにおける教職員と学生・生徒の日頃の努力によって得られたものではありませんが、同時に、これまで酪農学園の教育・研究にご協力いただきました皆様のおかげでもあります。心から感謝とお礼を申し上げます。

さて、私学を取り巻く環境は、少子化の進行により今後さらに厳しくなることは明らかなですが、社会の歩みを見ると、人類が狩猟採集生活から農業生活への変化を起点として、その後の科学技術の進歩と産業革命により人口の増加・高度経済成長・大都市への人口集中がもたらされ、生物多様性の喪失や地球環境問題、将来の食糧・水・資源・エネルギー供給の困難性が大きな問題になっています。

一方、我が国は、戦後、奇跡の高度経済成長を遂げ、アメリカに次ぐ世界第2の経済大国となりましたが、経済成長は止まり、少子化による人口減少時代を迎えはじめ、食料の6割強、資源・エネルギーのほとんどを海外に依存している現状にあります。

成長の限界が指摘されてから半世紀近くになりますが、今まさに農業を始めたことにより築き上げてきた人類社会は一大転換期を迎えているのです。

こうした中、我が国の発展には、未来を担う人材の育成が喫緊の課題であることから、教育改革が速いスピードで進められており、高中等教育を担う酪農学園としても、世界の平和と福祉の向上、我が国の発展に貢献し得る人材を育ててゆかなければなりません。

2015年は、人類社会の持続性に欠くことのできない土壌の現状に危機感を持った国連が国際土壌年に定め、各国に対し土壌保全の取り組みを促しましたが、「健土健民」を終生唱え続けた黒澤西蔵先生の生誕130年にも当たりました。

黒澤先生の恩師田中正造翁は、「真の文明は山を荒らさず、川を荒らさず、村を破らず、人を殺さざるべし」と喝破しましたが、今まさに、酪農学園の出番です。

2016年は、全日本ホルスタイン共進会で輝かしい成績を自信に、酪農学園のさらなる発展に向けて歩まねばなりません。酪農学園の役割と使命に改めてご理解いただき、引き続きのご支援、ご協力をお願い申し上げます。年頭のご挨拶といたします。

志を大きく、 今に生きる

学 長 竹花 一成



新年明けましておめでとうございます。

昨年8月、酪農学園大学学長に就任いたしました竹花一成です。専門は獣医解剖学・組織学で、消化器・運動器などを対象に研究を進めてきました。皆様の温かいご支援を何卒よろしくお願いいたします。

さて、2016年は創設者の黒澤西蔵先生・生誕131年、二代目理事長の佐藤貢先生・生誕118年、そして酪農学園創立83年目を迎えます。学園の創立100周年に向け、創立者たちの心を引き継ぎ、本学が行うべき役割をしっかりと認識する大事な時期に入っております。

何より、今我々が置かれている現実に真摯に向き合い、本学における学生教育をどのように行うかを模索し、結論を得る年にしたいと考えております。昨年我々が学んだことは、大学の組織人として規律の中で着実に教育研究を遂行していくべきだということでした。方向性の結論を得たら学長である私は船長となり、その方向を教職員にしっかりと示し、そこに向かって皆でオールを持ち、力強く漕いで少しでも早く目的に到達し、次の更なる目標を目指して進みたいと思っています。

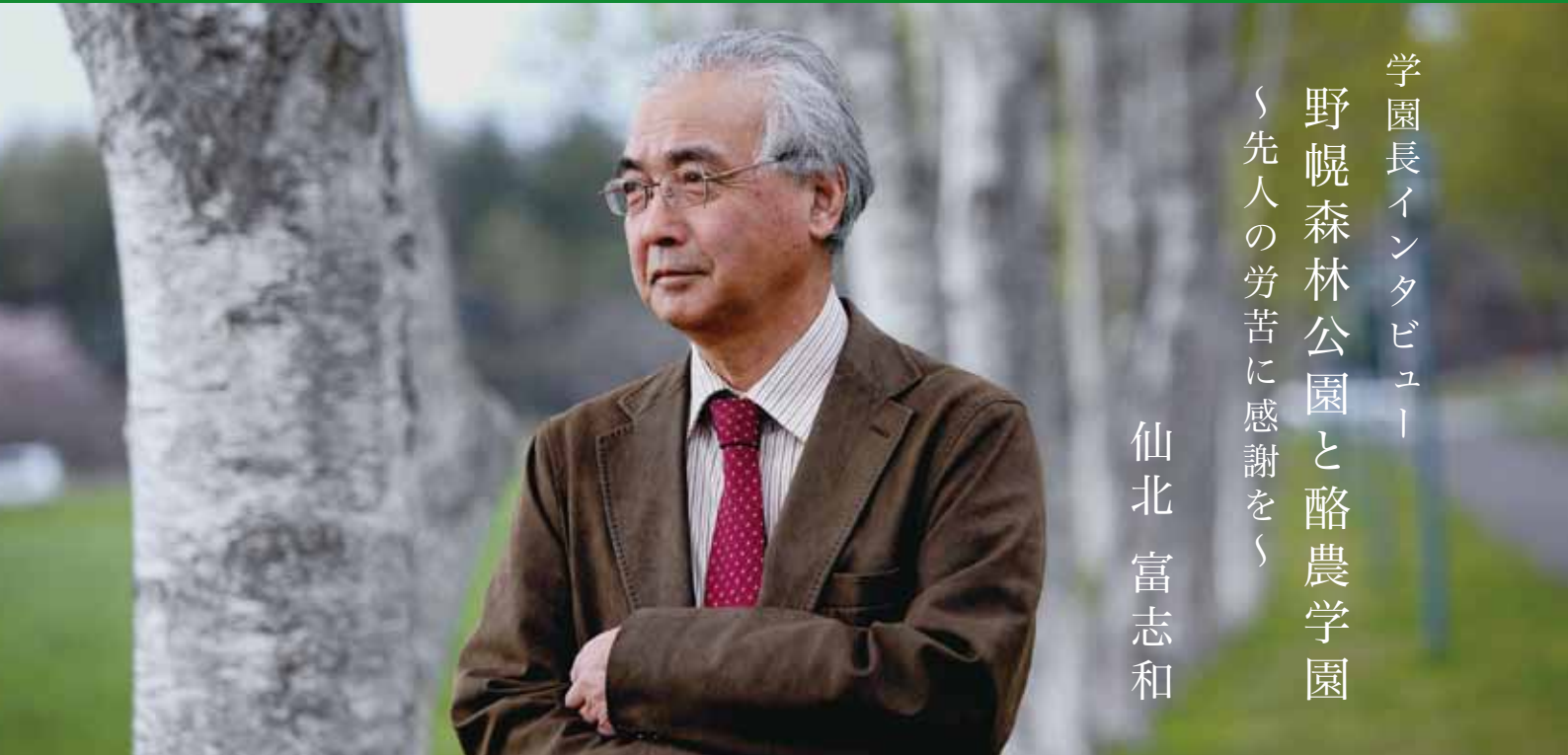
酪農学園大学は、農・食・環境・生命をキーワードに農業を土台とする安定的な食料供給に貢献する人材の育成を目的としています。その活動は世界的規模であり、かつ自然環境との調和を図りつつ、人と動物の生命の維持と福祉を目的とするものであります。

現在、少子化などにより地方の私立大学の多くが存亡の危機に立たされていますが、我々の大学は比較的良い位置を占めているといえます。これは本学には鮮明な特色があり、それを求めて日本中から学生が集まり、定員割れを起こしていないからです。これは、実学を重視する本学のあり方が社会で受け入れられている証左といえるかもしれません。しかし、このことに安住して、社会や時代の要請に応えることを忘れるようなことがあっては決していけないと思います。

我々の大学を取り巻く環境は目まぐるしく変わり、厳しさは一層増しています。その中で創立100周年に向け、そして更なる未来世代に向けてどうあるべきか、現旧教職員、学生、同窓生そして関係者の皆様一人一人の力をお借りしながら、一歩先を見据え、教育研究の質の向上に努めてまいりたいと思っています。

また、学園のシンボリック建築物である旧興農義塾野幌機農学校の生徒寮であった旧精農寮（1989年江別市都市景観賞を受賞）をきちんと維持していきたいとも考えております。これは学園だけではなく、同窓生の皆様のお力をお借りして、次世代につなぐ創立100周年を目途に進めるほかに手立てはなく、酪農学園同窓会の活動の中にもこのことをお願いしているところであります。

昨年、本学は第14回全日本ホルスタイン共進会で、関係する学生そして教職員の力により優秀な成績を残し、全国の畜産関係者から強く注目される存在になりました。この喜びを忘れることなく、新しい年も佳き年になるよう心より祈念いたしまして、私からの年頭の挨拶とさせていただきます。皆様のご健勝とご多幸を心より祈っております。



学園長インタビュー

野幌森林公園と酪農学園
―先人の労苦に感謝を―

仙北 富志和

酪農学園の背後には、2,053ヘクタールに及ぶ道立自然公園「野幌森林公園」があります。緑豊かなキャンパスの環境を支えているといってもいい、この素晴らしい教育環境は、青春時代を過ごした同窓生にとっても、在学している学生・生徒にとっても、貴重で得難いものです。

しかし、大都市・札幌市に隣接する平地の森林帯が、なぜ開拓の鋤から守られたのかを知る人は、ほとんどいません。また、本学園が現在地に在ることの歴史を知る人も少なくなりました。「今が当たり前」の風潮です。

そこで、「野幌森林公園」と「酪農学園」の歴史や先人の労苦の足跡などについて、仙北富志和学園長に伺いました。先人の思いを汲み取り、継承したいものです。

(聞き手：学園広報室)



道立自然公園「野幌森林公園」は、世界的に見ても貴重なものとされているようですが、その歴史的な歩みについて教えてください。

比較するには少し無理があるようにも思いますが、大都市近郊の平地の森林帯としては、オーストリアの「ウィーンの森」やドイツの「シュバルツバルト」(黒い森)に並ぶものといわれています。

その歴史は、明治の開拓使の時代に遡りますが、当初は5,600ヘクタール余が「野津幌官林」に指定されています。その後、御料林になったり国有林に戻ったりしますが、1968(昭和43)年に北海道100年記念事業の一環として、道立自然公園「野幌森林公園」に指定され、現在は2,053ヘクタールです。

ちなみに、地元の人が馴染んでいる「野幌原始林」は、1952(昭和27)年に特別天然記念物に指定されていますが、1954(昭和29)年の洞爺丸台風の被害により大部分が解除され、現在は北広島市内の39.7ヘクタールだけになっています。

この公園の存在価値をどのように捉えていますか。

江別市の林野率がどれくらいかという、10パーセント程度です。札幌市は61パーセント、岩見沢市は34パーセントとされています。このことから、江別市の人々にとって如何に大切なものかがうかがえるでしょう。この森林帯は、盗伐や利益を得るための払い下げによる荒廃を厳しく禁止されてきました。先人が残してくれたこの森林帯が果たしてきた役割をまとめてみると、水田をはじめとした農業用水や生活用水の確保、今では手を付けることが禁止されていますが、フキやタケノコなどの食材の提供、防風や防雪の役割、周辺に与える気象の微調整、なによりも四季折々の花や小鳥の鳴き声は生活に潤いを提供するものとして貴重です。その役割は、レクリエーションの場の提供や動植物の保存など、今後一層、重要なものになるでしょう。

北海道立図書館に隣接する住宅街も、戦前は原始林であったそうですね。

最初にも触れましたが、この森林帯の大きさは5,000ヘクタール以上ありました。大麻駅の南側、国道12号線を挟んだ一帯も手付かずの原生林でした。ところが、第二次世界大戦が始まり、戦災に遭った都市の復興のために、大量の用材が必要となり、道路に近いところから根株を残したまま伐採され、荒れてしまいました。その時、衆議院議員であった黒澤西藏の発案で、戦災者や引揚者の生活の場の確保や食糧増産のために、緊急入植政策が実施されることになりました。北海道立図書館に隣接する今の文京台一円は、苦労の末、畑や酪農・養鶏の場に変貌しました。

その後、昭和40年代から宅地化が進みました。

明治時代に、「原始林」の保存に立ち向かった開拓移民団の話をお聞かせください。

明治政府は、資源が豊富な北海道の開発を急ぐため、本州から大移民団を募集し、原野を開墾して農地にした場合、無償で払い下げという政策を行いました。1890(明治23)年、新潟県の名士であった関矢孫左衛門を社長とする「北越殖民社」が、今の東野幌一円に入植しました。原始林の中の沢水や多くの溜池は、貴重な農業・生活用水であり、森林帯は里山として大切なものでした。明治30年代の初め、北海道庁はこの原始林を札幌・白石・厚別・江別に分割移譲することを決定しました。これを聞いた関矢らは強く反発し、園田安賢・北海道長官に直訴します。事情を理解した園田長官は、「おのれが悪かった」と謝り、分割案は撤回されました。

先人の先見性に改めて感謝の念を持ちたいものです。

酪農学園が現在地に移転した経緯や「立ち退き農家」のご苦労などについて、お聞かせください。

本学園のスタートは、1933(昭和8)年、札幌村苗穂に創った「北海道酪農義塾」です。その後、第二次世界大戦が始まった時に、創立者の黒澤西藏は、もっと本格的な農民教育をするためにこの地を選びました。資金は酪農民の牛乳代から貯めた浄財です。ここには22戸の農家が生活していました。降って沸いた難題に困惑しますが、15戸は徐々に了解し、元野幌の豊平川沿いに移転します。しかし、移転地は水はけの悪い泥炭地で、洪水の常襲地帯でした。移転農家は、戦争の混乱もあり、大変な思いをしますが、機農学校の教員が経営の立て直しに協力しました。「教育のために」と理解し、立ち退きに同意した方々に感謝を忘れてはなりません。



酪農学園は大きな農場を持っていますが、当初の目的を教えてください。

文京台キャンパスの農場は重粘土、元野幌農場は泥炭土、植苗(苦小牧)農場は火山灰土です。この3つの土壌は農業にとっては劣悪で、北海道の農地の6割も占めていました。黒澤西藏は、この三劣悪土壌を酪農のふん尿によって改良できることの検証に挑んだのです。黒澤は、「牛を飼う目的は、乳や肉をとるためではない。国土を健土、肥沃にするためだ。物事の本質をわきまえなさい」と言い残しています。農業の使命は国土を健康にすることだ、ということです。

酪農学園の同窓生・在学生・教職員に「歴史を受け継ぐ」メッセージをお願いします。

黒澤西藏が残した訓の一つを紹介します。「一貫した理想、信念に生きる民族は永遠に繁栄する。同様に団体や個人も真理に基づく理想、信念が生き生きとして脈打つ時代は、必ず隆々たる発展を期すものである。もしも、その理想や信念が漸次薄れてゆくならば、いかに強大な国家も団体も、遠からず崩れ去るのは歴史の厳粛な事実である」・学園の隆々たる発展のために、肝に銘ずべき訓でしょう。



「酪翁自伝」を発刊

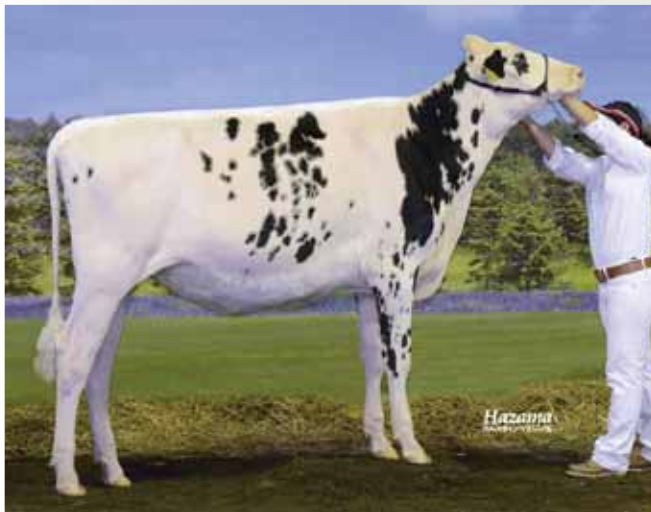
黒澤西藏翁の生誕130年を記念して、酪農学園から出版されました。本書は、1974(昭和49)年から約3年間、西藏翁が月刊誌「近代酪農」(短大酪農学校)に口述連載したものです。翁の「生いたち」から、北海道農業の発展のために全身全霊を尽くした信念と行動が赤裸々に語られています。北海道農政史を顧みる上で貴重なものです。



第14回全日本ホルスタイン共進会北海道大会が開催

乳牛のオリンピックともいわれる「第14回全日本ホルスタイン共進会(全共)北海道大会」が、10月23日～26日に、安平町の共進会場で開催され、本学園出品の3頭が好成績を収めました。

全共は、(一社)日本ホルスタイン登録協会(東京)が主催して、5年ごとに開かれていましたが、2010年に宮崎県で口蹄疫が発生し、翌年に延期されたものの、東日本大震災が発生したため、開催が再び見送られました。今回は10年ぶりとなる大会で、北海道での開催は初めての事です。



オークリーフ MBB ソフィア

9月19日・20日に安平町の北海道ホルスタイン共進会場で開催された、全共の選抜会となる北海道ホルスタイン ナショナル ショウで、本学園から5頭出品したうち、3頭が全共への出場を決めました。大学出品の乳牛が全共に出場するのは初めてのことで、本学園からの全共入賞は、1975年の兵庫大会にて、父 ホワイト パーチ パター ボーイ(当時酪農学園機農高校出品)が第10部(父系統群 経産 母を翼にする同父娘牛 4頭1組)で優等賞1席を獲得して以来、実に40年ぶりとなりました。



トワノモリ SH アイディ サンチエス リズ ET



トワノモリ アボンレア エクササイテーション コラ ET

本学園が快挙!

10月24日と25日に本審査が行われ、全国から出品されたホルスタイン種349頭、ジャージー種31頭が体型の美しさを競い合いました。審査の結果、本学園からは、オークリーフ MBB ソフィア(酪農学



写真提供: (一社)日本ホルスタイン登録協会

園フィールド教育研究センター出品)が第2部(育成牛)優等賞1席、トワノモリ SH アイディ サンチエス リズ ET(とわの森三愛高校出品)が第3部(育成牛)1等賞2席、トワノモリ アボンレア エクササイテーション コラ ET(ジャージー種)(酪農学園フィールド教育研究センター出品)が第17部(経産牛)優等賞2席となりました。大学出品の乳牛が部門1位となるのは史上初めてという快挙を成し遂げました。

リードマンコンテストで1位・2位!!

23日には、「全国高校生リードマンコンテスト」が行われ、全国の27高校から57名が牛を引き、美しい姿に見せるよう競い合いました。とわの森三愛高校機農コースの1年生から3年生まで8名の生徒が出場し、2年生の部で中川拓哉さんがベストリードマン(1位)に、3年生の部では、尾藤瑞菜さんがセカンドベストリードマン(2位)を獲得しました。

札幌会場で牛を引く

また24日、札幌会場(道庁赤れんが前広場)では、リードマンコンテスト・デモンストレーションが行われ、本学の学生6名が実演しました。一般の人たちに審査方法などが分かりやすく解説され、学生たちは本番さながらの真剣な面持ちで牛を引いて歩きました。



◎本学園の関わり(高校生、大学生、教職員約300名が関わりました)

10月17日～27日・出品牛の衛生対策・診療(獣医学類・学部の教員、学生)

18日～27日・出品牛の管理(高校生、大学生、職員、教員)
22日・酪農セミナー(大学生、職員、教員)

・高校生交流パーティ(高校生、教員)
23日・開会式プラカード持ち(女子高校生)
・リードマンコンテスト(高校生)

23日～26日・乳牛改良歴史展(大学生、教員)
・大学PRブースの出展(職員)

24日・リードマンコンテスト・デモンストレーション(札幌会場)(大学生、職員、教員)

24日～25日・牛削蹄実演会(職員)

24日～26日・花摘み隊～審査場内の糞取り(大学生)



札幌市と連携と協働に関する協定を締結



本学と札幌市は、地域の課題解決と生物多様性の保全に向けた「連携と協働に関する協定」を締結しました。調印式は7月9日に札幌市役所本庁舎市長会議室において行われ、干場信司前学長と秋元克広市長が

協定書に署名しました。

本学は札幌市との関わりとして、これまで農食環境学群環境共生学類が中心となり、札幌市版レッドリスト作成委員会への参加や市のヒグマ対策、エゾシカ対策などで連携してきました。今回の協定締結をきっかけとして、関係のさらなる発展が期待されます。

札幌市からは、本学の専門的な知見と学生の行動力を、市の生物多様性の保全に最大限活用することや、本学が市の様々な事業や施設を、研究や教育の実践の場として活用することが期待されています。

タイ国コンケン大学と学術交流協定を締結



本学とタイ国コンケン大学は、5月7日、本学において学術交流協定を締結しました。調印式には、コンケン大学からチューチャット・カモラード獣医学部長とファナン・スクサワット国際交流担当が、本学からは竹花一成獣医学群長、中出哲也獣医学類長(当時)、萩原克郎教授(獣医学類・獣医ウイルス学ユニット)、蒔田浩平准教授(獣医学類・獣医疫学ユニット)が出席しました。

コンケン大学はタイの首都バンコクから北東に440キロのコンケン市に位置し、17の学部および大学院を擁する、タイ東北部で最大の、タイ国内でもトップクラスの国立総合大学です。本学では、2月に獣医学部6年の学生2名を受け入れ、3カ月間の臨床研修を実施し、5月11日に修了式を行いました。

今回の協定締結により、今後、メコンデルタ地域の感染症調査をはじめ、教員と学生による相互学術交流事業を進めていく予定です。

本学とタイ保健省医科学局が学術交流協定を締結

本学とタイの保健省医科学局は、3月25日付けで学術交流協定を締結しました。協定締結式典は5月7日、タイ保健省で行われ、本学循環農学類の佐々木均教授(応用昆虫学研究室)が出席して調印しました。佐々木教授がタイのNational Institutes of Health (国立衛生研究所)と26年間に渡り取り組んできた吸血昆虫の防除・生態調査などの共同研究が、この協定に結びつきました。式典では、佐々木教授の長年の貢献に対し、タイ保健省より感謝の盾が贈られました。

佐々木教授は、1989年に、JICAの医療協力専門家としてタイ



国立衛生研究所に3カ月滞在して以来、交流を続けてきました。機関同士で正式に協定を結んだことで、今後はより広い分野での研究協力が期待されます。

第5回国際野生動物管理学術会議を開催

国際的に最も大規模な野生動物の学術会議で、今回、アジアで初の開催となる「第5回国際野生動物管理学術会議」(日本哺乳類学会・米国野生動物学会主催)が、7月26日～30



日に札幌コンベンションセンターで開催されました。環境共生学類の吉田剛司教授(野生動物保護管理学研究室)が事務局長を務めたほか、同学類の佐藤喜和教授(野生動物生態学研究室)、伊吾田宏正准教授(狩猟管理学研究室)、野生動物について研究する学生・院生が運営に携わりました。会議には46カ国から1,339名が参加し、前回の396名を大きく上回りました。

初日には、「都市と近郊における野生動物管理」をテーマとする国際シンポジウムが開催され、佐藤教授ら4名の学者が講演しました。佐藤教授は、「札幌圏における都市と近郊の野生動物管理～人口減少期を迎えた札幌市の市街地と近郊におけるヒグマの管理」と題して講演を行いました。

28日には、世界の野生動物の研究者と高校生が交流する特別シンポジウムが開催され、約150名の高校生が集まる中、北海道内の6校の高校生が野生動物に関する調査の成果を報告しました。

会場では、5日間に渡りさまざまなテーマの学術交流が行われ、大盛況のうちに終了しました。

臼井優講師が日本獣医学会で 公衆衛生学分科会奨励賞を受賞

9月7日～9日に青森県の北里大学で開催された、第158回日本獣医学会学術集会において、本学獣医学群獣医学類の臼井優講師(食品衛生学ユニット)が発表した「CAMERA法による野外サンプル(鶏肉及び鶏糞便)からの薬剤耐性カンピロバクターの迅速検出法」が、公衆衛生学分科会奨励賞を受賞しました。この賞は、特に優れた研究業績をあげた同分科会の若手会員の顕彰を目的としており、臼井講師の報告は、従来法の作業時間を大幅に短縮したもので、独創的な原理と高い実用性が評価されました。

また、9月5日に北海道医療大学で開催された第82回日本細菌学会北海道支部学術総会では、食品衛生学ユニットの大学院生1名と卒業生2名が優秀発表により表彰を受けました。3月に博士課程を修了した大久保実彦さん(現北海道大学大学院保健科学研究院・病態解析学分野助教)が、「繊維虫との共培養で大腸菌から漏れ出すクオラムセンシング分子 autoinducer-2 について」の演題で最優秀賞を受賞しました。同じく3月に米国留学から帰国した佐藤豊孝さん(現札幌医科大学・医学部微生物学講座助教)が、「チゲサイクリン非感受性大腸菌はフルオロキノロン耐性株に多く認められる」の演題で、さらに大学院・獣医学研究科博士課程2年の福田昭さんが、「鶏舎環境での薬剤耐性菌の伝播及び維持におけるハエの役割」の演題で優秀賞を受賞しました。

第49回日本臨床検査医学会 北海道支部例会で若手優秀演題賞を受賞

食と健康学類・管理栄養士コース4年の佐々木梨乃さん(栄養学研究室・眞船直樹教授)らが、9月26日に北海道大学で行われた第49回日本臨床検査医学会北海道支部例会で、「唾液へのアミラーゼS型シスチン及びSlgA分泌と旨味に関する研究」を発表し、今回初めて設けられた若手優秀演題賞を受賞しました。



栄養学研究室では、食べ物を食べたときに感じる「おいしさ」を指標で表すことに着目し、おいしい物を食べたときに出る特有の唾液量や唾液成分の変化について実験を進めてきました。

佐々木さんは、「支えてくださった方々への感謝しかありません。実験では大変なこともありましたが、成功したときはとてもうれしかったです。今後も研究の結果を解析して、より、明確な数値に表していきたい」と話しました。

北海道病院レシピコンテストで 連続入賞

2014年より開催されている、(一社)地域健康社会研究所が主催する「北海道病院レシピコンテスト」において、本学の学生が第1回から第3回まで連続入賞を果たしました。このコンテストは、北海道民の健康をサポートすることを目的として、北海道の食材を使った、家庭で簡単にできる病院レシピを募集するものです。各回ごとにテーマが設けられており、管理栄養士、栄養士の資格を持つ「プロ部門」と、栄養学科のある短大・大学の学生の「学生部門」に分かれています。その中で、本学の学生が以下のとおり入賞しました。

第1回「高血圧症・脂質異常症・糖尿病対策」(2014年)



学生部門 金賞

「ひじきの混ぜご飯／オハウ風 鮭のミルク煮／小松菜としらすの和え物／パプリカのカレーさんぴら」(脂質異常症向け対策レシピ)

元野晶さん、馬場志央里さん、山田誠さん(食と健康学類3年(当時))

第2回「低カロリースイーツ」(2015年)



学生部門 銀賞

「黒石大豆のノンオイルビスコッティー」

宮本彩加さん、吉野浩世さん、森伊歩希さん(食と健康学類2年)

第3回「乳和食」(2015年)



学生部門 銀賞

「ミルクちゃんちゃん焼／カッテージチーズととろろのほうれん草おひたし／トマトのはちみつ煮ヨーグルトかけ」

宮本彩加さん、吉野浩世さん(食と健康学類2年)

学生部門 銀賞

「ミルク味噌で鮭のちゃんちゃん焼き／日高ほうれん草のおひたし おろし和え／網走産しじみのお吸い物」

佐藤薫さん(食と健康学類3年)

2015年度 高校生による牛乳類を 使ったお菓子レシピ 入賞作品を商品化

本学園は、「酪農」を冠する学校法人及び大学として、牧草から牛乳・乳製品を生み出す酪農の意義に対する理解を深めてもらうとともに、牛乳類とスイーツの結びつきによる牛乳の消費拡大を図るため、全国の高校生から牛乳類を使ったお菓子レシピを募集し、表彰する取り組みを行っています。今年度は428点の応募があり、その中から入賞作品9点が選ばれました。



7月25日には、本学で上位3点の最終審査を行い、田村咲樹さん(北海道小樽潮陵高校3年)の「はい、チーズ! milkレープの雪景色」が最優秀賞(酪農学園大学学長賞)を、阿部舞子さん(北海道真狩高校3年)の「ほうじ茶とずんだ〜和のムース〜」が優秀賞(光塩学園調理製菓専門学校校長賞)を、田口美咲さん(北海道三笠高校3年)の「セサミルクシュー」が優秀賞(セイコーマート賞)を受賞しました。

入賞作品のうち8点が、コンビニチェーンの(株)セイコーマートにより商品化され、10月5日～11月1日の期間限定で、道内1,077店舗や系列店で販売されました。本学園からは、水谷祐介さん(とわの森三愛高校2年)の「ころころ大学芋のミルクプリン」と、加瀬亜弓さん(同校3年)の「牛(ぎゅう)っとレアチーズクリームが詰まったエクレア」が商品化されました。

2015年度父母懇談会を開催

2015年度の父母懇談会は、10月10日に、509名の父母の皆様に出席いただきました。

竹花一成学長による説明の後、学群(学部)懇談会、学類懇談会、個別面談を実施したほか、在学生によるプレゼンテーションや、成績・就学、学生生活、就職の各部局による相談も行われました。また、獣医学群・学部では、10月9日に講義参観を実施し、37名の父母が参加しました。

懇談会に出席した父母の方々からは、「学校の様子がよくわかり、とても有意義でした」「個別面談では、先生が生徒一人ひとりに向き合い、細やかな気遣いを持っていてに指導してくださっていると感じました」「在学生によるプレゼンテーションが素晴らしく、学んでいる内容がよくわかりました」「就職状況や国試対策を説明していただき、安心しました」「学長の説明から、学生への熱い思いや深い愛情が感じられました」などの意見をいただきました。



第43回毎日農業記録賞に4名が入賞

毎日新聞社が主催する、「農」や「食」、「農に関わる環境」への思い、体験、提言をつづる作文コンクール、「2015年度(第43回)毎日農業記録賞」の入賞作品が11月5日に発表されました。

全国1,139編(一般部門219編、高校生部門920編)の応募の中から、一般部門の優良賞に、井上絵里加さん(獣医保健看護学類2年)の「農家になる!!」が選ばれました。また、一般部門の地区入賞に、倉科妙香さん(循環農学類3年)の「畜産を通じて」、桑田経平さん(食と健康学類3年)の「私と父とりんごの夢〜親子で歩む六次産業化への道〜」、川畑孝二さん(循環農学類3年)の「農業が嫌いな私」が選ばれました。



肉牛研究会が育てた黒毛和牛肉が、 最高等級「A-5」に格付け



本学のサークル、肉牛研究会が育てて6月1日出荷した黒毛和種の2頭の枝肉が、最高等級A-5に格付けされました。出荷したのは「冬月(ふゆつき)」と「氷柱(つらら)」で、枝肉重量は冬月が538kg、氷柱が545kg、肉質等級のうち霜降り等級(B.M.S.)は、冬月がNo.11、氷柱が最高のNo.12でした。出荷した牛肉は、札幌市内や小樽市内などのドン・キホーテで販売されたほか、焼肉店でも提供されました。

肉牛研究会は現在51名の学生が所属し、黒毛和種や日本短角種、ヘレフォード種との交雑種など、繁殖牛8頭、哺育牛3頭、育成牛4頭、肥育牛3頭、そして馬1頭を研究会の牛舎で飼育しています。毎日朝7時と、授業が終わった16時30分より、学生たちが交代で牛の世話をしています。繁殖から肥育、牛の出荷までをすべて学生たち自身で行っており、出荷した枝肉の一部は、出荷祭で、精肉や牛すじ煮込みとして学内で販売しています。



機 農コース 第14回全日本ホルスタイン共進会北海道大会報告

10月23日～26日に開催された、10年ぶりの共進会には、コース全員が関わりました。

22日は高校生のための特別プログラムであるジャッジングやリードマンスクールなどが行われ、毛刈り講習会では、カナダのイーストサイドファームのブロイス・トンプソン氏が実演と分かりやすい説明をしてくれ、全国27校の高校生たちと一緒に最新の技術に触れる機会となりました。また、昼食では、本校農業クラブ執行部がホスト役となり、交流会とジンギスカンを楽しんでいただきました。

23日には、機農コース全学年の女子生徒とフードクリエイイトコース2年生の女子生徒がプラカードを持ち、開会式に花を添えました。

また、午後からは、リードマンコンテストが開催され、本校から北海道代表として出場した8名が日頃の技術を発揮しました。1年生の部で3位と4位、2年生の部で1位と5位、3年生の部で2位と4位となり、応援にも力が入りました。

24日からの比較審査は、高校特別枠として第3部に出品したトワノモリ SH アイディ サンチエス リズ ETが、全国から選りすぐられた30頭と競い、1等2席(8番)を獲得し、日頃の管理の成果を表せたと思います。

出陳にあたり、酪農学園をはじめ、江別市や石狩管内、全道各地の酪農家の方のご協力と、会場で多くの卒業生の方に激励をいただいたことに感謝申し上げます。ありがとうございました。



獣 医進学コース 北海道内(1年生)・沖縄(2年生) 研修旅行を実施

獣医進学コースでは、全国各地で活躍する酪農学園大学OBの獣医師が勤める職場を訪問しています。1年次は道内、2年次は沖縄の研修旅行を実施しています。

1年生は、10月7日～9日に、鹿追町の家畜診療所や帯広市食肉衛生検査所、旭川市旭山動物園などを訪れ、多様な獣医師の仕事について学びました。

2年生は、10月13日～17日に、北海道とは異なる環境で生きる生物についての理解を深めることを目的として、沖縄研修旅行を実施しました。酪農学園大学の卒業生である沖縄美ら海水族館の植田啓一獣医師からは、ご自身の経験をもとに獣医師を志す者への熱いメッセージをいただきました。

また、琉球大学では、教授と学生からイリオモテヤマネコをはじめとする沖縄の野生動物についての講演や研究内容の発表を聞いた後、本校の生徒が、「北海道における野生動物であるエゾシカとヒトとの共生」をテーマに発表しました。野生動物という共通の話題を通して、大学生と高校生が学術的な交流を行いました。

これらの研修旅行は、将来、獣医師を目指している生徒たちにとって貴重な経験となり、大学進学に向けての学習意欲の向上につながっています。



ア ドバンスコース ベトナム研修旅行を実施

アドバンスコース2年生は、10月12日～17日に、ベトナム研修旅行を実施しました。

ベトナムは、日本企業の進出なども相次ぎ、毎年5%を超える経済成長を遂げています。

生徒たちは想像をはるかに超えて発展している実情を見て、驚きの声を上げていました。

Le Phong Hong高校での学校交流では、現地高校生の高い語学力に圧倒されながらも、英語の授業に参加してグループワークに取り組み、日本について英語でプレゼンテーションしました。孤児院での障がいをもつ子どもたち

との交流では、まさに「人を愛する」を実践。言葉の壁を感じさせない積極的な関わりが見られました。また、日系企業であるPLUS株式会社の現地法人を訪問し、社長さんから説明を伺い、グローバル展開する企業の勢いを感じてきました。多くの生徒にとって初めての海外旅行でしたが、発展途上国の力強さを肌で感じ、国際理解を深める良い機会となりました。そして、日本での日常生活がいかに恵まれているかを再確認した有意義な旅行となりました。



フードクリエイイトコース 南九州研修旅行を実施

フードクリエイイトコース2年生は、10月13日～17日に、南九州研修旅行を実施しました。例年は、韓国への研修旅行でしたが、マーズ(中東呼吸器症候群)の影響で実施できませんでした。

南九州では、①北海道とは異なる気候の食文化や農業・漁業・畜産業を比較すること、②口蹄疫で大きな損失を受けた宮崎県を訪ね、食の安全について改めて考えること、③鹿児島県の知覧特攻会館の見学を通し、日本の歴史だけではなく世界の歴史・平和について真剣に考えること、を目的に研修してきました。

口蹄疫メモリアルセンターでは、実際に被害にあった酪農家の講話を聴き、口蹄疫を宮崎県で食い止めるため、やむなく牛を殺処分したことや風評被害、中傷の言葉を聴く辛さなど大変さを知ることができました。

知覧特攻会館では、陸軍特別攻撃隊員の遺影、遺品、記録等の貴重な資料を見学し、戦争の悲惨さや命の尊さを学びました。どの生徒にとっても、将来の自分のあり方を考えるきっかけになりました。



総 合教育コース 台湾研修旅行を実施

総合教育コース2年生は、10月12日～17日に台湾研修旅行を実施しました。躍進著しい中華圏の台湾で歴史や文化を学ぶとともに、2年生で必修となっている「基礎中国語」の授業の一環という位置付けです。

台北市内の観光では、世界四大博物館のひとつである故宮博物院や中正紀念堂、忠烈祠、そして映画「千と千尋の神隠し」の舞台ともいわれる「九份」などを見学しました。すべての行程において天気に恵まれ、特に、1年の8割が雨といわれる九份も快晴となり、素晴らしい景色を見ることができました。

また、新北市立林口高級中学校との交流では、生徒一人ひとりに現地の高校生が案内役として付いてくださり、より深い交流を持つことができました。

最終日は、自主研修として、班ごとに日本語を学んでいる大学生のガイドと共に台北市内を見学し、有意義な一日を過ごしました。どの生徒も日本国内ではできない貴重な体験をすることができ、視野を広げることにつながる研修となりました。



ト ップアスリート健康コース 関東研修旅行を実施

トップアスリート健康コース2年生は、10月13日～16日に、関東研修旅行を実施しました。

この研修では、通常授業ではなかなか実施できない取り組みとして、平和展示祈念資料館での戦争を体験された方による講演会、筑波大学内に設置された「野性の森」での様々な課題を論理的発想、想像力、団結力を駆使して克服していくグループワーク、多摩川での「ハイドロスピード」、「好きな言葉」と題した夜のスピーチ大会など数々の自己啓発の取り組みを行いました。

多くの皆様に支えられていることを生徒自身が改めて認識し、クラスの生徒同士が今まで以上にお互いのことを知る大変すばらしい3泊4日で、今後の成長が大いに期待できる研修旅行となりました。



通 信制課程 通学コース・通信コースの報告

酪農学園の通信制高校だからこそ、一緒に作物を育て、収穫して、調理を体験します。その実学の場には、農・食・生命・環境を学ぶ笑顔と喜びがあふれます。

今年もサツマイモ・落花生を加え10種類以上の作物を収穫しました。週3日の通学コースの生徒は、月・木曜に行われる通常授業と火曜の実学プログラムに参加しています。集中スクーリングで学ぶ通信コースの生徒も、短期集中の学校生活を満喫し、農作業に触れ、さらに北海道の自然と産業に触れる1泊の北海道研修(南富良野・美瑛・雨竜沼・大沼・新得)に取り組んでいます。

どちらのコースも校長先生と聖書を学びます。芸術鑑賞ではアフリカン太鼓ジャンベのリズムと豊かな表現を全員で体験しました。イベントでのオリジナルメニュー「オニコロ」の提供も大好評で、生徒が協力して社会参加する場として充実しています。お互いを大切に、ゆっくと成長する時を共有する、もう一つのとわの森の歩みが着実に続けられています。





新規就農で花き栽培にチャレンジ



北海道旭川市

たま だい ゆう じ

玉臺 雄司 さん

酪農学園大学食品流通学科2001年卒、
学生時代は北光寮の寮生、兵庫県出身

せい こ

玉臺 聖子 さん

酪農学園短期大学部教養学科1999年卒、学生
時代はラグビー部マネージャー、旭川市出身

雄司さんは、脱サラして、2012年に旭川市郊外で新規就農しました。卒業と同時に結婚した聖子さんとともに切り花専門の経営を始めて、4年目となります。今年はJ A東旭川の花き部会長を務めています。地域の人たちに支えられながら、自分たちの理想に向かって頑張っている玉臺さん夫妻に話を伺いました。

新規就農までの経過

雄司さん：就職したのは超氷河期で、10年ほど外資系企業などで営業の仕事をしていました。将来もこの仕事を続けていけるのかと考えたときに、漠然と農業のことが頭に浮かびました。それから、新規就農相談会に足を運び、北海道担い手育成センターにも行きました。旭川市役所に相談に行ったときに、旭川は水田地帯なので、自分も稲作をやりたいと言ったら、水田は農地価格が高くて初期投資が大きいからやめたほうがいいと言われました。たまたま、2009（平成21）年頃、同じ会社に勤めていた先輩が辞めて、実家の花き農家を継ぐことになり、週末に何度か手伝いに行きました。そこで花と出会って、花きで新規就農をめざそうと思うようになりました。

聖子さん：うちのおじいちゃんが旭川市内で水田農家をしていました。農作業が大変なのを見ていたので、はじめは農業をやるなんてと反対しました。

雄司さん：旭川市役所の新規就農の担当者がとても熱心で、研修先や補助金制度の紹介、初期投資のシミュレーション、就農計画の作成など手厚くサポートしてくれました。いい研修先があると森山博明さんを紹介してもらい、2010（平成22）年8月から1年半、研修に入りました。森山さんも花きで新規就農した先輩なので、とても参考になりました。

そのころ、旭川市が2012（平成24）年度に新規就農の新たな支援事業を作るので、それを活用してはどうかと勧められ、2012（平成24）年4月に新規就農しました。新たに農業を始める人は、初期投資が多いと失敗すると聞いていましたが、自分は国の経営体育成支援事業や就農施設等資金、旭川市の営農開始支援補助金を活用することで、初期投資のほとんどをカバーすることができて、ありがたかったです。土地は、妻の祖父の農地のうち56アールを購入しました。一部、水田もありますが、農作業は委託して、花き専業でやっています。



トルコギキョウ

作っている花の種類

雄司さん：ビニールハウスは10棟ありますが、2棟は育苗などに使っていて、8棟で栽培しています。主力のスターチスは4棟で栽培しています。スターチスは仏花としても使われる花なので、お盆やお彼岸の需要をねらって3月下旬から順々に定植し、お盆から10月まで5品種を出荷しています。トルコギキョウは今年で2年目となりますが、2棟で7～8品種を栽培しています。3月中旬から播種して、お盆から10月中旬まで出荷しています。ストックは、3月中旬に播種して6月から採花するものと、7月中旬に播種して9月下旬から採花する2つの作型で作っています。ヒマワリは「父の日」需要に合わせて、3月下旬から播種し、6月から7月下旬まで出荷しています。このほかに、ビニールハウスの間の露地でヤマゴボウやブプレウラム、姫ひまわりなどを作っています。まもなく今年の出荷を終えて、ハウスを片付けます。

出荷がお盆からなので、売り上げもお盆以降となります。春先の収入を確保するため、今年から空いているビニールハウスでコマツナを栽培を始めました。農作業のない冬期間は、除雪のアルバイトをしています。

採花後も手間がかかります

雄司さん：採花した花は、納屋に運んで規格に沿って切りそろえ、下葉を取って束ねた後、鮮度保持のために前処理剤を入れた水に浸けて水揚げします。その後、ダンボール箱に詰めて出荷します。出荷先は札幌、旭川など道内の花き市場が4割で、6割は関東、東海など道外です。

道外向けは、前日切った花を翌朝、農協に運びます。道内向けは、前日切った花と朝切った花を昼頃に農協に運びます。地元市場向けは、午後切ったものを夕方運びます。作業は、私たち2人とパートさん1人でやっています。

多いときで1日50ケースを出荷します。本数にすると2,500から3,000本です。お盆前にスターチスを100ケース欲しいと注文が入ったときには、夜中にヘッドライトを点けて、徹夜で採花したこともありました。

聖子さん：中学2年、小学6年、4歳の子どもがいます。忙しいときは、上の子が下の子の面倒を見てくれるので、助かっています。

雄司さん：今は納屋で調製作業をしています。手狭で作業がやりにくいです。効率よく作業できるように、来年は、ビニールハウス1棟を選花場として使うつもりです。



ストックのハウス

花き栽培の魅力

聖子さん：自分たちの花を見て、きれい、素敵と言ってもらとうれしいですね。

雄司さん：ほかの農産物と違って、自分で売り先を決められるところがいいです。各市場のセリの価格を見ながら、高いところに出荷することができます。ヒマワリは、市場から指名で注文が来るんです。品質を評価してくれていると思うと、やりがいを感じますね。

聖子さん：うちでは、ヒマワリを1本1本、くるくる回しながら見て、虫に食われていないか、傷んでいないかをチェックして、葉の形も整えます。手間はかかりますが、丁寧に、良いものを出荷するようにしています。

雄司さん：市場からLINEで、この価格で何ケースほしいと連絡が入り、LINEでやり取りすることもあります。



出荷規格に沿った長さに切りそろえる

苦労したこと

雄司さん：ここは、もともと水田で、土壌は重粘土です。雨が降ると水が溜まってしまうし、砕土は大変です。自分のトラクターでは起こせなくて、友人が大型トラクターを持って助けに来てくれたこともありました。

雨が続いて病気が出てハウス内に蔓延し、収穫できなかったこともあり、なかなか計画どおりにはいきません。また、自分は花粉症なので、実は農作業はつらいんです。

それでも、就農して大変なときに、除雪の機械を貸してくれたり、苗の定植を手伝ってくれる人がいて、周りの方たちにはとても助けられてきました。

これからの目標

雄司さん：小さな面積でも高収益を上げる経営が理想です。花きで1,000万円前後の農業粗収益を上げている先輩が目標です。あと10年くらいで、花きで食べていけるようになるのが夢です。

これから借入金の返済が始まるので、売り上げを増やす必要があります。今の棟数では足りないの、来年はビニールハウスを増やす予定です。農協からは、地域の特産物で安定した収入が見込めるピーマンを作らないかと勧められますけれども、考えています。

農家には定年がありません。20～30年後も花き栽培を続けて、60歳を超えて人生を振り返ったときに、良い選択をしたと思えるようにしたいですね。

酪農学園大学にも、花きの研究室ができたと言いました。スターチスやトルコギキョウの研究もしているそうなので、農閑期に視察に行きたいです。

※花き～花の咲く草、草花。観賞用に栽培する植物のこと。



日々畜産を学び、優秀な肉牛を生産しながら研究に励む

循環農学類 家畜繁殖学研究室 動物生殖工学研究室

学生たちは、本学園のフィールド教育研究センター・肉畜生産ステーションで肉牛を飼養しながら、肉牛について研究しています。現在、51頭の黒毛和種と16頭の日本短角種を飼育し、学生が繁殖から哺育、育成、肥育、出荷までを一手に担っています。全国の大学附属肉牛農場の中で、学生が飼養管理を行っているのは、本学だけです。

優れた肉牛を生産

肉畜生産ステーションは開設されてから8年目に入り、肉牛の飼養管理技術が確立するとともに、計画性を持った繁殖により血統の良い牛が揃いつつあり、日々のきめ細やかな管理と相まって優秀な肉牛が生産されています。

毎年開催される北海道肉用牛共進会では、出品した肉牛は上位入賞を果たしており、子牛の販売成績では、9月に出荷した雌牛が、道央・江別圏で最も高い価格で落札されました。また、最近出荷した肥育牛の枝肉は、8頭中の6頭が最高等級のA-5、2頭がA-4という非常に高い評価を得ています。このように、大学農場でも農家から一目置かれるような優れた肉牛を生産していることで、関係者の注目を集めています。

牛に与える餌の配合は、学生たちが自ら考えて工夫しています。濃厚飼料の価格が上昇していることから、自給飼料を活用して飼料費の低減をめざし、肉畜生産ステーションの牧草をできる限り使用して最後まで飽食給与しているほか、食品残さであるビール粕サイレージも活用しています。

「ビール粕の活用方法は、先輩から代々引き継いできました。3月に出荷してA-5の格付けを得た黒毛和種には3割の割合で与えていましたが、今は5割に挑戦しています。肉質向上はもちろん大切ですが、経営面からコスト削減も重要なテーマです」と、家畜繁殖学研究室4年の福田充紀さんは言います。



さまざまなテーマの研究に取り組む



動物生殖工学研究室4年の西村陽佑さんは、牛の足に歩数計を装着して活動量を計測し、個体管理するシステムを研究しています。「歩数のデータは自動的に受信機に飛んで、パソコンに蓄積されます。発情期を迎えると牛の活動

量が増えるので、データの推移を見て、人工授精の適切な時間を推定することができます。発情発見率が上がると、受胎率の向上につながります。発情だけではなく、逆に活動量の減少から体調不良を発見するなど、これからさらに応用していきたい」と話しました。

超音波を使ったエコー検査により肉の霜降り状態を確認し、出荷の適切なタイミングを測る研究や、人工授精の受胎率を上げ、生産性を上げることで子牛の生産コストを低減する方法など、学生たちはさまざまな研究に取り組んでいます。

畜産経営そのものを学ぶ

牛の管理は365日、21名の学生たちが当番制で行っており、毎日7時30分と16時から、給餌、堆肥出し、牛舎の清掃を行い、牛を清潔に保ちます。

学生たちが自ら牛を大切に育て、販売までしっかりと関わることで、畜産経営そのものを学んでいます。「牛を見て、触って、現場を知ることができ、農家の何が大変なのか、何が大切なのかを実学として学べます。さらに、実験室で高度な研究をすることで、さまざまな技術や知識も身に付けられます」と学生たちは言います。人工授精師などの専門技術者や、新規就農をめざす、家業の畜産業を継ぐ、あるいはさらなる研究の道に進むなど、将来へ向けて確実に歩みを進めています。



高等学校同窓会の動向



第14回酪農学園高等学校関東甲信越地区合同同窓会が、11月7日(土)13時から酪農学園東京オフィス(東京交通会館11階)を会場に開催されました。本学園からは、福山二仁常務理事、榮忍校長、浅

野政輝高校同窓会長(酪農学園同窓会副会長)が出席しました。

短期大学部同窓会の動向



短大Ⅱコースの記念誌「ふみあと」が完成しました。内容は黒澤西藏翁の実学教育の実践という強い意志のもと創設されたⅡコース20年間の軌跡を記録したものです。

第1編:挨拶、Ⅱコースの創られた経緯、教育内容、教職員の記憶、年表など。第2編:卒業生の思い出、寮の思い出、座談会、活躍する卒業生、写真集などです。

まもなく、ⅡコースOB全員に配布される予定です。

大学同窓会校友会の動向



・大学同窓会校友会の組織一元化が実質的にスタートして2年目を迎えました。昨年同様に入学時には新入生にパスケースが配られ、会長が入学式で歓迎の挨拶を述べました。(詳細は校友会報22号参照)

・準会員(学生)向けの応援企画として6月に4回にわたり日替わり丼(健土健民牛乳付)を200円で提供し、好評でした。(詳細は校友会報参照)

・シリーズ酪農学園の精神(8)が刊行されました。表題は「協同組合の社会的意義」。村岡範男名誉教授に執筆いただきました。(変形A5判25頁)

酪農学園同窓会十勝支部総会のご案内

日時: 2016年1月23日(土)11時~13時

会場: 若竹会館

議題: 支部総会 事業報告、事業計画審議 等
終了後、昼食懇親会(会費3,500円)

十勝地区在住で総会・懇親会にご出席いただける方は、同封の返信用葉書により、氏名、フリガナ、所属(大短高)、連絡先等と、「1月23日」「十勝支部総会」と明記の上、1月8日(金)までにお送りいただくか、Eメール rg-dosok@rakuno.ac.jpまでご連絡をお願いします。

地区支部同窓会等の動向

・支部設立関係

大分県支部設立が九州地区理事会で承認され、12月13日(日)に設立総会開催。

滋賀県支部設立を近畿地区幹事会で承認。

中国地区島根県支部の設立準備会を開催。

北海道第4地区上川第2支部設立総会を11月28日(土)に開催。

・地区総会等

4月12日(日) 関東甲信越地区総会(岡田勉会長)が伊香保温泉「千明仁泉亭」会場で開催。

4月26日(日) 中部地区7県支部長会議が名古屋市「百楽名古屋店」で開催。

5月30日(土) 東北地区支部長会議が仙台市「晩翠亭いこい荘」で開催。

6月28日(日) 九州地区支部長会議(理事会)が博多市「AQUA博多」で開催。

7月25日(土) 近畿地区幹事会が京都市「聖護院御殿荘」で開催。

11月21日(土) 北海道第三(道南)地区会が八雲町で開催。

・支部総会

全国各地で開催された支部総会については紙面の都合上、下記の同窓会ホームページ、QRコードからご覧ください。

・職域OB会・クラブOB会・同期会

今年度も職域OB会(教員OB会緑風会、開業獣医師OB会酪小獣)や体育系クラブOB会、文化系クラブOB会、高校、短大、大学の同期会が多数開催されております。詳細は同窓会ホームページからご覧ください。

・全日本ホルスタイン共進会関連

10月23日(金)~26日(月)、北海道安平町で「第14回全日本ホルスタイン共進会」が10年ぶりに開催されました。全国各地から同窓生60数名が出品し、好成績を収めました。23日(金)には同窓生歓迎のための「酪農学園同窓会in全共」を新さっぽろアーケシティホテルで開催し、関係者約60名にご出席いただきました。

今後の総会予定

1月 7日(木)	緑風会(教員OB会) 総会・懇親会
1月 9日(土)	長崎県支部新年会
1月23日(土)	十勝支部(道5区) 総会
1月30日(土)	九州地区沖縄県支部総会(予定)
1月31日(日)	九州地区鹿児島県支部総会

お知らせとお願い

住所変更された同窓生の方は、下記のいずれかの方法で、酪農学園同窓会事務局までご連絡ください。

- TEL: 011-386-1196
- FAX: 011-386-5987
- E-mail: rg-dosok@rakuno.ac.jp
- 〒069-8501 江別市文京台緑町582

酪農学園同窓会事務局

URL: <http://rakuno.org/> ご覧ください。





2015年度 第24回ホームカミングデーを開催

9月12日に第24回目となるホームカミングデーが開催されました。11時から同窓生会館前での野外バーベキューランチでスタート。本学園で生産された野菜や牛肉などを食べながら、同窓生や教職員約100名が和やかに交流し、絆を深めました。

その後、黒澤記念講堂に会場を移して、記念礼拝が行われました。榮忍校長の司式により、讃美歌合唱、聖書ルカによる福音書15章17-19節の朗読、物故者追悼、祈祷と続き、榮校長が「我に返る時」と題して奨励を行いました。最後に全員で酪農讃歌を合唱して、礼拝は終了となりました。

続く記念講演では、本学の獣医学科 8 期生で、岐阜県で「山のハム工房ゴバル」を営んでいる石原潔氏が、「ハム屋の創造—獣医解剖学教室からNOSAI、そしてガンジスへ—」と題し、講演しました。

人の動き

【退職】

2015年5月15日付け発令 高 校	教 諭	板 金 健
2015年5月31日付け発令 高 校	講 師（嘱託）	村 岡 千 紘
2015年7月31日付け発令 大 学	獣医学類 教授	打 出 毅

【採用】

2015年7月1日付け発令 高 校	講 師（嘱託）	片 山 雅 恵
2015年8月1日付け発令 高 校	教 諭（嘱託）	増 廣 健 太
2015年10月1日付け発令 大 学	学 務 部 学 務 課 就 職 部 就 職 課 事 務 局 施 設 課	主 任 主 事 佐 藤 秀 主 任 主 事 藤 田 肇 主 任 技 師 石 坂 隆 久

【異動】

2015年10月1日付け発令 大 学	教育センター教務1課 就 職 部 就 職 課 入 試 部 入 試 課	主 任 主 事 大 津 円 加 (前、入試部入試課主任主事) 主 任 主 事 入 江 遥 (前、教育センター教務1課主任主事) 主 任 主 事 志 田 理 恵 (前、就職部就職課主任主事)
-----------------------	--	---

大学役付者

2015年8月26日付け理事長発令 学 長	竹 花 一 成
2015年9月1日付け理事長発令 宗 教 主 任	榮 忍
2015年10月1日付け理事長発令 副 学 長 農 食 環 境 学 群 長 兼、獣医学群長・獣医学部長 酪 農 学 研 究 科 長 獣 医 学 研 究 科 長	石 原 智 明 荒 木 和 秋 竹 花 一 成 尾 碕 亨 田 村 豊

らくらく健身術 「ストレッチで体も血管も柔軟に!!」



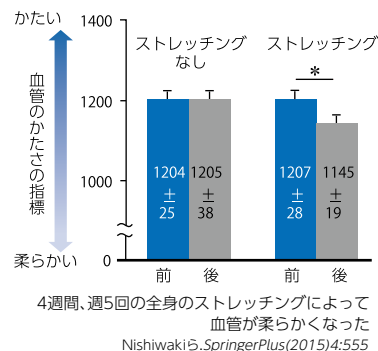
食と健康学類 食・健康スポーツ科学研究室
山口 太一 准教授



体力は加齢に伴い否が応にも低下しますが、体力の一要素である体の柔軟性もその例外ではありません。つまり、年をとると体がたかくなるのです。また、同じように血管も加齢によってたかくなり、血管がかたくなる病気である動脈硬化になりやすくなります。実は、これら体のかたさと血管のかたさとは関係があり、中高齢者では体がかたい人ほど血管がかたいことが明らかになっています (Yamamotoら, 2009)。

一方で、中高齢者を対象に体を柔らかくするための運動、すなわち、ストレッチングを継続的に実施することは体を柔らかくす

るだけでなく、血管も柔らかくすることが示されています (図; Nishiwakiら, 2015)。最近、体がたかくなってきていませんか? もしかしら血管もかたくなっているやもしれません。つらい運動はなかなか続けられませんが、ストレッチングぐらいならという方も多いのでは?是非、ストレッチングを日常生活に取り入れ、体も血管も柔らかくしてみませんか。



聖句解説

酪農学園大学 宗教主任 榮 忍

旧約聖書の詩編から、新たな年明けに、この98編 1 節を味わいたいと思います。

主なる神がなされた「救いの御業」に全く新たな価値観が表されたことを驚き、応答として、新たな歌でほめたたえることこそがふさわしい、と言うのです。

力を持ち、立派な働きをする者が評価されるなら誰もがうなずけます。しかし神は、小さく弱い民を愛し、守り、救われたのです。時を超えて、主イエスもまた同じ救いを示されました。そして今、わたしたちが小さな者であっても、神の愛に守られていることを知り、感謝して歩むなら、そこに新たな希望の光が照らされるのです。良い年となりますように。

酪農学園大学 Vol.141
2016.1.1

発行：学校法人酪農学園
酪農学園大学／大学院／とわの森三愛高等学校

編集：学園広報室
〒069-8501 北海道江別市文京台緑町582
TEL (011) 388-4158 FAX (011) 388-4157
HPアドレス：http://www.rakuno.ac.jp
E-mail：koho@rakuno.ac.jp

印刷：社会福祉法人 北海道リハビリ